

小口雅史編

## 『津軽安藤氏と北方世界』

—藤崎シンポジウム「北の中世を考える」—

中村和之

榎森進

アイヌ民族と安藤氏

第二部 シンポジウム

小口雅史(司会)

北の中世を考える

### I

第三部 シンポジウム参加記

平川新

『藤崎系図』と『秋田系図』の関係

菊池徹夫

北の中世を垣間見る

湊學

安倍一族の末裔に生まれて

いま、安藤氏が注目されている。一九九三年には、安藤氏を主題とするシンポジウムが相継いで開催された。三月に青森県藤崎町で「藤崎シンポジウム・北の中世を考える」<sup>(1)</sup>が開かれ、十月には青森市で第十四回歴史博フォーラム「遺跡にさぐる北日本―中世都市十三湊と安藤氏」<sup>(2)</sup>93市浦シンポジウム」<sup>(2)</sup>が開かれるという盛況ぶりである。本書は、藤崎シンポジウムの集録であり、七百名を超す参加者の熱気であふれた、当日の雰囲気がいきいきと記録されている。

本書は、三部構成からなっている。以下にその内容を示す。

第一部 基調報告・講演・コメント

小口雅史 津軽安藤氏の歴史とその研究

遠藤 巖 安藤氏と津軽の世界

入間田宣夫 鎌倉建長寺と藤崎護国寺と安藤氏

斉藤利男・小山逸彦 藤崎城とその周辺(コメント)

佐藤 仁 板碑と中世藤崎(コメント)

大石直正 平泉藤原氏と津軽安藤氏

このほかに、小口雅史氏らの執筆によるコラム「安藤と安東」「唐系伝説と藤崎」「蝦夷管領」「十三湊と安東氏」「よみがえる日之本將軍の城」と、遠藤巖氏の「安藤氏関係略年表」が付けられるという行き届いた編集となっている。

本書の中核をなすのは、第一部の小口雅史氏の基調報告と、遠藤巖・入間田宣夫・大石直正・榎森進氏の講演である。基調報告は、これまでの安藤氏に関する研究史を手際よく整理し、さらに安藤氏の略史ともなっている。なお、遠藤巖氏以下の講演については、小口氏が「まえがき」で簡単に触れておられるほか、菊池徹夫氏が「北の中世を垣間見る」のなかで内容を簡潔に要約されている。

本書には、多方面から安藤氏の実像に迫ろうとするアプローチが提示されている。本書で示された数多くの論点を取り上げ、それらに論評を加えることは、筆者の能力のとうてい及ばぬ作業である。そこで本稿で

は、東北アジア史の視点から、本書に関わるいくつかの問題を論じ、紹介の責を塞ぐことにしたいと思う。

## II

これまでも多くの論者によって指摘されてきたように、十三湊を中心とした安藤氏の活動は、日本海交易の発展を基盤としたものであった。またこの時期は、元朝・明朝がアムールランドに勢力を伸ばした時期と重なっており、安藤氏と中国王朝の活動が、北海道やサハリンにどのような影響を及ぼしていたかが注目を集めてきた。

この問題について、榎森進「アイヌ民族と安藤氏」は、『元史』『元文類』などの記述により、元朝の骨鬼(クニノクニアイヌ)征討と、『日蓮遺文』にみえる文永五(一二六八)年の「蚤ぞ」蜂起との関連を示唆されている。また、明朝がアムール川下流に設置した奴兒干都司が、サハリンにも三つの衛を設置し、これらの衛の内「波羅河衛」は明末の万暦一一(一五八三)年にいたるまで、「襲職」を要請していたと指摘する。榎森氏の見解は、元・明朝のサハリン・アムールランドにおける政治的影響力を、和田清氏や洞富雄氏の所説よりも、安定度の高いものとして評価するところに特徴がある。特に、宣徳九(一四三四)年以降、奴兒干都司の機能が事実上停止したのちも、明朝に対して官職の世襲が申請されていたとすれば、当然朝貢も継続されていたことになる。この指摘は、山丹交易の開始時期とも絡んで、重要な問題提起である。

ただし、明朝のアムールランド経営が、どの程度継続性を持ったもの

であったかについては、さらに検討の必要がある。永楽一一(一四一三)年、明の太監・亦失哈は「土民教化」のため、奴兒干都司に永寧寺を建立した。この経緯を記した「勅修奴兒干永寧寺碑記」は、宣徳八(一四三三)年に永寧寺を再建した時の「重建永寧寺碑記」と共に、最初のアムールランドを知る上で、基本史料とされるものである。さて、これらの碑文の記載によれば、奴兒干都司は永楽の末年には弱体化したようである。永寧寺も破壊されてしまったため、再建する必要があったのである。このように、明朝の影響力は安定的であったとは思われず、さらに、奴兒干都司の停止後、「襲職」がどのように行われていたかについても不明な点が多い。

また、元朝が北京を放棄した一三六八年以降、モンゴリア・マンチュリアでは元・明両軍の激戦が続いたが、一三八七年、マンチュリアの元軍が崩壊したため、アムール川下流に駐屯する元軍は孤立した。この結果、サハリンにおける元朝の勢力は、急激に後退したとみられる。アイヌのサハリンへの進出は、この空白を埋めるかたちでなされたと思われるが、元・明交代期という東アジアの大変動が、日本列島の北方にどのような影響を及ぼしていたのかを明らかにすることも、「北の蒙古襲来」の実態を明らかにする上で重要な課題であろう。

## III

安藤氏の北方地域への認識については、一四七一年に朝鮮で編纂された日本・琉球の地誌に、申叔舟『海東諸国紀』に次のような興味深い記

述がある。

窃に観るに、国の東海の中にあるものは一に非ず。而して、日本は最も久しく、且つ大なり。其の地は黒竜江の北に始まり、我が済州の南に至り、琉球と相接し、其の勢い甚だ長し。

ここには、日本の北方を「黒竜江の北」にいたるとする認識が示されている。これは、サハリンが日本に属すると考えられていたことを示すが、『海東諸国紀』が編纂された一五世紀は、明の奴兒干都司経営が行われていた時期であるから、この認識は、明朝からの情報を基にした可能性がある。ところが、明代に残された、サハリン及びアイヌについての記述からは、日本との関係を窺わせるものは見いだせない。明代の地方志で、一四八八年に刊行された『遼東志』巻九、外志、建州、には、

苦兀は奴兒干の海の東に在る。身は多毛で、頭に熊皮を帯び、身に花布を衣る。木弓を持ち、矢は尺餘、毒を鏃に塗り、中れば必死ぬ。器械は堅利である。父母が死ねば、腸胃を剝り去り、屍体は曝乾して、出入に之を負い、飲食に必ず祭り、居処では敢て対しない、約二三年し、然る後之を棄てる。

という記述がみえる。苦兀とは、骨鬼と同様に *Khutu* の音訳であり、アイヌをさす語である。苦兀の矢が一尺余り（明代の一尺は三二cm）で毒を塗ることなどは、近世アイヌ文化期の矢が四〇cm程度であることから、アイヌのことを記したものと考えられる。ミイラ造りとみられる部分については、よく分からないが、いずれにせよ日本との関係を窺うことができる記載は全くないのである。従って、先の『海東諸国紀』の地理認識は明朝からのものではなく、日本から対馬などを經由し

でもたらされたと考えなければならない。

そこで注目されるのが、一四八二年に朝鮮に偽使を遣わした「夷千島王遐叉」の書契にある「野老浦」である。この夷千島王について、遠藤巖「安藤氏と津軽の世界」では安藤政季とされているが、アイヌの首長とする見解や、対馬の宗氏などとする見解もある。夷千島王の版図の西端にあるという「野老浦」が「オランカイ」（中国東北地方）であるとすれば、サハリンやアムール川流域についての地理認識が、日本側にあつたことの証左になる。そしてその認識は、「渡党」蝦夷や「唐子」蝦夷を支配下に置く、安藤氏のものであつたと考えなければならぬ。安藤氏の北方に対する知識は、驚くほど広くかつ正確であつたことを窺うことができる。

#### IV

安藤氏の位置づけについては、これを蝦夷とする見解と、蝦夷を統括する職務についているのであり蝦夷ではないとする見解との対立がある。大石直正「平泉藤原氏と津軽安藤氏」は、平泉藤原氏や安藤氏を「境界権力」としてとらえ、このような見解の対立自体が、境界的な政治権力の持っていた両義性の結果であるとみる。平泉藤原氏・安藤氏から蠣崎（松前）氏にいたる北辺の勢力を「境界権力」とみる見解については、菊池勇夫氏も近著『アイヌ民族と日本人』において論じられている。

さて、この「境界」領域に対する日本と中国の政策を比較してみると、そこには類似点がいくつかある。遠藤巖「安藤氏と津軽の世界」では、

「東夷成敗権」に基づく夷島への流刑が安藤氏によって実施されたことが指摘されているが、元代では奴兒干の地は流刑地であり、特に重罪人の流刑地とされていた。また、入間田宣夫「鎌倉建長寺と藤崎護国寺と安藤氏」によって明らかにされた、藤崎護国寺の大伽藍の創建、及び関東御祈禱所に列せられた点などは、先にものべた明朝による永寧寺の建立になぞらえることができるのではないか。さらに、「土民教化」のために建立した永寧寺が短期間に破壊されたことは、「堂塔多く造りし善人」安藤五郎が「いかにとして、頸をばゑぞにとられぬぞ」という『日蓮遺文』にみえる事態を思わせる。

このように、国家の政策では類似した部分があるものの、中国王朝の北方の「境界」領域には、安藤氏のような「境界権力」といえるものは成立しなかった。その理由は不明だが、ひとつには元・明朝の政治的影響力が安定的なものではなく、その結果として「境界権力」が形成されるにはいたらなかったと考えることができるのではないか。なお、佐々木史郎氏は、蠣崎氏の蝦夷地支配の確立過程を、ヌルハチが女真族を統合していく過程に対比し、両者が境界的な性格を引き継ぐことにより、支配権を確立したとする見解を発表されている。しかし、ヌルハチの属した建州女直（女真）を、安藤氏や蠣崎氏が属したような「境界」領域の政治勢力に含めてしまつてよいかについては疑問である。

## V

本書の扱う範囲からはややはずれてしまうが、国立歴史民俗博物館が

行つた最近の調査では、これまで安藤氏との関係で論じられてきた福島城からは、一〇一―一世紀の遺物が発見され、福島城の周辺には「防御的集落」が発見されており、軍事的緊張があつた可能性が強いという。一方、北海道開拓記念館の南サハリン・アニワ湾のペロカーメンナヤ遺跡の調査によれば、同遺跡は一〇世紀の年代を持つ「チャシ様遺構」である<sup>(6)</sup>とされている。僅か一例のみの報告ではあるが、この時期に、砦の機能を持つ遺構が造られたことは、北海道の北と南の対岸に共に軍事的緊張感があつたことを示すものである。このこと自体も興味深い問題であるが、斉藤・小山両氏のコメント「藤崎城とその周辺」にも指摘されているように、発掘調査の必要性が裏づけられた事例といえよう。

本書が示すように、東北・北海道史の研究は、常に北方と南方とに目を配りながら進めていかなければならない。そのためには、中国語史料を参照せねばならず、テーマによっては満州語史料を利用することさえ必要となる。本書は、安藤氏を主題として、日本語・中国語史料の組み合わせという困難な作業を成し遂げた大きな成果といえよう。

## 注

- (1) 藤崎シンポジウムの参加記「北の中世を歩く」が、『歴史読本』第三八巻一―号、一九九三年、に発表されている。
- (2) 国立歴史民俗博物館編『中世都市十三湊と安藤氏』新人物往来社、一九九四年。
- (3) 和田清「明初の満洲経略」『東亜史研究』満洲篇、東洋文庫、一九五五年。

- (4) 洞富雄『樺太史研究―唐太と山丹―』新樹社、一九五六年。
- (5) 長節子「夷千島王遐又の朝鮮への書契にみえる『野老浦』」『地方史研究』第二四四号、一九九三年。
- (6) 菊池勇夫著『アイヌ民族と日本人―東アジアのなかの蝦夷地』朝日新聞社、一九九四年。
- (7) 佐々木史郎「北海の交易―大陸の情勢と中世蝦夷の動向」『岩波講座日本通史』第十卷、岩波書店、一九九四年。

- (8) 注(2)書、八二頁。
- (9) 平川善祥「サハリン・オホーツク文化末期の様相」『北の歴史・文化交流研究事業報告』北海道開拓記念館、一九九五年。  
 (河出書房新社、四六判、一九九五年三月刊、三六八頁、三四〇〇円)  
 (なかむら・かずゆき 北海道札幌樞西高校教諭)